



ひとりでお泊り



こぐまじゅんこ

ぼくな、小学3年生。ひとりっこだ。

でも、来年のお正月がくるころ、新しく妹がやってくる予定なんだ。

おかあさんのおなかの中にいる妹は、（たぶん妹だろう、とお医者さんが行ったらしいんだけど）ときどき、おかあさんのおなかをけるようになった。

おかあさんが、ぼくにも、おなかをさわらせようとするんだけど、ぼくには、なんだか不思議な気持ちというか、不気味でさえあって、さわる気になれない。

大きなおなかのおかあさんも、今までのおかあさんじゃないみたいで、ぼくは、はっきりいってとまどっている。

でも、おかあさんは、赤ちゃんの靴下を編んだり、これまで聞いたこともない、モーツァルトとか聞いているんだ。

なんだか家じゅうが、妹のための準備一色になってしまっている。

ぼくなんか、いてもいなくてもいいみたいだ。

はっきりいって、おもしろくない。

ぼくは、おかあさんが、声をかけてきても無視するようにしていた。

ある日、おかあさんが、

「だいき、冬休みの間、おばあちゃんの家にお泊りに行ってきてね。おなかの赤ちゃんが早く出てこようとしているから、おかあさん、病院で絶対安静にしていけないといけないの。だいきは、おばあちゃんの家、ひとりで泊らせてもらうことにしたからね。」

ぼくは、びっくりした。

おかあさんが、入院だって！

赤ちゃんのことをはじめて心配した。

「いやだ！」

と言ってこまらせたかったけど、ぼくも、男だ。ここは協力するしかない。

バスに乗って、20分のところに、おばあちゃんの家はある。

ひとりでバスに乗るのは、はじめてだ。

だけど、おかあさんが、バスカードの使い方を教えてくれたから、ドキドキしながら乗りこむ。

乗車口のところにある、四角くて長い機械にカードを当てるとピッと音がして、金額がでた。

いすにすわって、運転席の横にあるカードをおすものも確認できた。

なんとかひとりで、バスに乗れた。

ヤットコというバス停でおりると、おばあちゃんが迎えにきてくれていた。

今日は、12月24日。クリスマス・イブだ。フライドチキンが食べたいなあ・・・と思っ
いたら、おばあちゃんが、

「今日、うっかり、クリスマスだってことを忘れていて、おでんを作ったんだよ。おじいちゃん
と2人だけで暮らしていると、クリスマスも関係なくってねえ。ごめんよ。」

と言う。

「なんだ。おでんか。」

ぼくは、がっかりした。

おばあちゃんの家につくと、おじいちゃんも、

「だいき、よう来たなあ。大きゅうなったのう。」

と、目をほそめて言ってくれた。

ぼくは、ちょっと照れくさくなって、だまって家にあがりこんだ。

ひとりで、ゲームをしていると、おばあちゃんが、

「もう、夕ご飯の時間じゃよ。食べようか。」

と言ってくる。

(えっ、まだ5時だよ。)

と、ぼくは思ったけど、「ごうにいればごうにしたがえ」ということばを知っていたから、食
べることにした。

あつあつのおでん。

こんにやくに、玉子、大根、それから、おばあちゃんのおでんには、アキレスのくしが入っ
ている。

アキレスって食べたことないから、ぼくは、食べずにいた。

こんにやくや、玉子は、だしがきいていて、とってもおいしい。

おばあちゃんが、

「アキレスも食べてみたらどうだい？」

と、あんまりしつこくすすめるものだから、いやいやながら、ひと口食べてみる。

口の中で、とろっととろけるようなやわらかい感触がちょっと苦手だったけど、ごくんと飲み
込んだ。

おでんをたらふく食べたころ、おとうさんから電話があった。

「おかあさんも、赤ちゃんも、落ち着いているみたい。だいき、あさって、迎えに行くからな。
おばあちゃんの言うことをよくきくんだよ。」

と言っていた。

ぼくは、
「まかしといて！」
と言って電話をきった。

なんだか、ぼくも早く妹に会いたくなかった。